中村俊定文庫
文庫 18
784

葎雫庵午心句集

# 玉田集
# 錦毬集

合本

玉田集序

そもし此集を玉田と名つくるはかの
羊公の玉を植てよき娘をゆるしと
いふ心にあらて吾か師午心か
息子かき集て作りおける句を
もちよりて撰き及した北元か
眼にふれて只玉をひろへる
画くらへてよ
えもいへる

ゆゑしる玉田集とハ名はつけゝる
なるあまりさへ真とし　和氏ぐん
識るまゝの昭らるるに擬ふつき
まるり絶え光なき　月の缺さし
ゆゑありの変りや守らん真意
ふえて見えての悩みも赤祕し
さもましし雛るゝや守し　い哉
迷移ふ、およそ十よ五八の見え

さりけるハ情の比る人なかしのくる
まし後のあまきゝんしら今年
彼といふ事も志まされるぬ覚ら
えかしこそおしめし耳よ以て
あし或え伝るよ書捨るて手拾ひ
て心みいふ危おきぬるをうちはめ
いさゝか一入かとようち午心ゝのよ
玉るきるえあつてれ懐るゝえ

北元か撰して定まよの杉のいとく
くて羊芊の俳いふなるあり
師のこゝまり見ゆるを彼書
本あつ賀されて面ほもんあえ
せことのかけはさ子なるいふちん
于時文政二年正月寛量午心居士
大祥忌にあたる日　葎雪庵北元

叙

暖

# 玉田集

## 春之部

午心遺稿

元日や門戸守捺ぬ松の太

元日や人の見付ぬ野の足

元日やあるまゝなぬ縄乃口

初鏡のあらや始まる窓涼し

庭よりも日まこ守り有の末

松に鶏も立ぬ初日のこてち

こゝろき女ありしく筆始

代々の集名しの集との春

隠もる共日の寒さ流るゝ
流してみえ庵も寅卯の初深空
行ぬを引て入うまえ今も哉
初めやれ人とおもひて雪のふと
稿引や昭て許し門の枕き
かゆつえや手杖の場ても神の月
笑ふかん妻迄戸の目も俗偶師
万ずよふ盤入て行け読山
七草菜大根えり見しく
ふ系やそうもよきる老の波



仰棹の何で見てくる不多成
只そようし月日や矢の下枝若
芒明者沙井の下の枝若や
旅見秘て法意よ過日哉
を薪や牛の古筆よ鏡のき
土筆目子うもきいろうりう
麦の糸ふ只まうのみよおく
梅くの読よかうえふくう絶
未よ飲くるやさりぬ梅のち
手桑て作よおくれて梅の井ん

柳くのくるゝも　廿日あまりに
かゝしの柳お虫の声さだか
万世の柳子路きえ陰だ
柳葉の糸偉なく蒼かな
くらべても柳井の葉椿
何とこく走る水し柳依て有
青柳や田に柳あをし　古徳
さし柳天和に志ゝ包りけり
枝拂し柳抜け・柳まくゝりけり
夕凪の糸々の上柳小

見てまりふう柳の志らうされ
都さや雨の田面の夕柳
青柳や女をとしの案あき
柳きかの乍にこゆゝ雨ふらず
夕日より葉ゆり来るれなりゝ雨
まの雪　柳よ見月にかかれけり
春風や臣妻も子きき　枝の汐
春風や大桃花色のぬくらし枝
春雨や柳田にさはる　杖の筆
やまとろや来る雨柳に　旅の糸

きの粉やみなとやおりて淋しし
きのきの名紙寿子ふくしける
春の姿やうんそ浮かと見せにけり
きの粉や従ふつまつまし火に朱
松風も山露も只嘘かな
耳ふさぐ嘘にあれは夏もなし
目の嘘見まれぬところに住ておる
花や朱杯ろうしと雪降
花みもうしくこえふ糸ん
しらひさや言に住る　四ッの海

花まつの緒子音の　金一文
しらひ寿のおのれ都に浮浮寿の
花や障子明けて植を撫
花や汁かな見ゆる　松の中
しらひさや菊に花の香りさと
花や淋しけくの河を星
ふところ何者も内にみれきの猫
正月や紙試すらる　酒の味
正月もすぼや山にの薪う
本きえ落二月の梅こぼるる

みしとの為やきさらぎ　十五日
畑打やこれの墓の古兜
山ざくや打とも見へぬ麦を額
雲の行燕子あゆる麦の小
あられの信はひろき麦の海
麦のうく浮木を綰ぬきもうし
菜の畑てしの銀やまめらえ
麦の夕おろしうられ夏帆じ
松ぼうこやのおうさ麦の月
麦の月うろきを　掃ふ袂かな

見し燕子舎に客やまちの月
漕彦れ寒うや舟て飛よ麦の月
おぼろ月田で飛よ法の光かな
深呆の影得しや蒸小てふ
蝶ゆられ蒸や畔地いさのくへ
蒸小蝶空に睫子夢小せり
雨多の山あをし　峰田す
月庵よ日のさし初て田畑かな
余所を見て赤赤のへき莚
てきる　橋乃守均の批取かな

清栄の古風なりし　時なれり
船旅のあはれなし　夕霞
洞印の墳なりし　立ぬるかな
あき宮くらべいはぬ　袖下り
松杉の古き新緑や　藤鎌
下総の井出よ遊ぶ日に　緋縅
曲水の縁りやおしよ　下り蛍
晴ての雷まし　汐干狩
風呂よしと　材の近や　汐干狩
蕣入りや　松よいとま　白乃青



美しく　父入りや　彼岸の日の本
やぶいりやはじめて見る　父の業
やぶいりやはじめて見る　泣上戸
了上くし名を　写らや　新あ
新あまし紀の字ら　桶　岩下
新あき川や　御衛の魚の泡
好みらくや来てハ　松よ月ふる
桜咲て　昼の花陰　葉なりけり
桜咲し　元禄車の行れけり
客人や　枝の筋も花の上

新緑木爪ちり給へは似けり
梅やふき待ちにみてこそ
ゐる雲に入りし浄土の業かな
あいまて多の隣きし夫の行に
夫の御日の出ぬうちより
其の鳴きあゆく家て花落ちや
松え々家をし太りの御
聖人まのとやみり其の徳
きこえても名れ太りのかな
流菜のも咲く芦の花かな

ふるされ上まよろしつきかな
百人の衛枝ちりし虫の雲
小ぬやもの あり松見し
為のも本のかよこれあり
飛きてもの気も見かな
垂也しかあるは桂めるれ
ま字りてハもしまそ出なかな
紅くまのもかなる別るかな
ふもんみてる命もふけ
者もや多ゆるまふり行

るすかるゝおもちをぬ気なりけり
若菜見ハ此ひとわかれ夢さめて
あかて梅ハおもよまちくらす
ふ中やさくらのもみ名ある
折まゐの千かとよ寒く梅しら
ねめいそ来り　二月の花梅
作ふよ女の手折きのしら
は紫やあはえてハ此とちる
はすゞのりの新る　茶かふ
ろきの中る　晩くやものある

越きて果よ人ゝしそのやま
袖まいさ名残の下の京せよ
恋つゝ身ゆ　葦の新ゆし
こまやかに多草　立ぬすゞれ草
ふ葉やまゝんのふもののやま
まのりや小石守る紙の音
足雲様て小川守つるまゝる
まのりや抱さひしき名の底
見かさの杭形その乃るまゝる
本成来して堂掛し頃の内

若子や見ぬ子まれく　楣之志
三月のりをすゝみしと　おのみさら
ふりやりのましつらう　承のく
日免春ゝかつて實の七ッかふ
咲ぞゆそろつらう　春のもじ
山本の太石嬉や　松まふち
玉をしむ　松尾必要して　不物氣
百ろのいとよ大よの行　楽ん





## 夏之部

おしかゞ若かむしハ見ゑれ白毛
芙蓉の鯉で佛母ちるゑかさる
心さゆ見ゑる　月山　東え
くきものと女のいくる　孫かな
紀宮へ母のゆえ來る　孫ぐ
青れのもえくまきや青　すゞき
菖蒲のまゝ雨けめぐれ　係合
湯入後もあつさん　夕ぐれ
箱立て　湯壺家よ　牡丹ぐ

あら字尽て牡丹なとさりきはあらし
みとり子の親かくしあそひくらく
かきつはたあれ白きも捨てけり
月ひとり葵の紋の古衣かな
くとくとも花ゑ立りけり　柾　垣
君子の従法すんて花見かな
柿の子や妻ある比のいす子かな
筆や捨てあり　釈迦はおく
竹の子やおしまひとり　人も世
竹の子や印一今年まつり

うゑてみぬ田をつくりけり　時も
子級石を行す　冬かな
かとまれ峰や松風の嵐かな
不如帰さへつるめも又つれし
惟光を案をさそかれかとまれ
時ゐをまきて又の別れかな
果子なる峰や花より牛の雨
かはらや藥練ぬて立りけり
蝙蝠や来まむ　柿の花
肴の枝や豆は狐の米さくら

先りて蝴蝶の羽を有かくき
蝶〱やよりて拾かくさ手折る
若しら枝や可しき妻の中紀
結枝や佐れくらりるくさま
風の芥子牡丹ぞおもひ出り
つめえ咲むし一夜の法浮く
松風子孝偈あらん一夜山
夜気の命さらは硯哉
くくるくく果つき今宵
幟立京や梱りつしやま

とるてて老の身をやせしあやめ
風そ家みむすし浴や新菖蒲
浴芽生の木柚浴りかしいかち
さなそれやいそしとおもふ身のるま
五月雨の中る 切の下深し
五月雨子背てみるや牧の鳴
さくらのやさ行まて松の下つし
さくらのや縁時百糸咲さくら
さ若さきやえりをりくら山男
五月雨や茨の香さらむ時明り

さゝ牛蒡やせめて坊主の餌ぐらん
夜々啼て細露けし瓜の花
様や無宮しくらゐいのちむし
立なよ東染つゝて嫁かぶ
萩の末や流るゝよ済せてかもの里
すゝきの見ますま茶よりさゝら
学を移のあぬりも落て織たれ
むしろ寄字鳴れ笑みれて味
かつてもの名ハの実も付陰し
佛法ハ消てゝ置ならず

暮ハしくも弥あしん君来
出ぬき清気にてしとおもひぬ
の行ゝり秋よ念ゝ子二彷
夜の雨松山の雪も浮立ぬ
陰近をあまくめやさゞの雨
芦や一の舟の浪下房
夜虫や桐井雨の京に入
麻の子の川をさし京下る
行ゝ舟や槐ゝゝる舟のあん
番ひゐよ心残るもひく盃し

二荷の菜一荷の外や芒のうね

芒の清立や芋の下　かハつ

かるかや柳の露も下　秋葉

かゝしや人ハ心の色　守栄

年の暮よ日の夜寒そまます　亭

冬の夜やさゝくしめる　樵木の枝

おして南てらる　下かれ

秋吟しきりつゝかな　芸の花

清雪よ秋来その　白海

秋風て清雪ようの　そもろ

夕影や浴そかゝみ片一枚

夕日やふえるのまた　翠

浜まちりて涌あり　化之外

姥ろやひとりのふ　老の扇

井姫のうきも　まくろし　今所

去ゐまり　橋なりと　おすみ舟

暑しといふまりときへおりなり

光まり雲まて　あきこの月

涼の終り　階斗の角よ入るり

孤木終て　残つかゝすゝら

いつまでの花おのれかな　川まこ
すゝきまやみをやめるは花なし
かけろふの出る庵そ持て㐂程かな

秋之部

立そめる秋やきぬ桁のまつり衣
桐の葉ちるもさりしのまぬに
似ぬ情の番みそのいふ　鈴鼻し
蓑笠や立も須も　風のすゑ

冷

野の寝る星の窓やさびしらん
つまごひの声も寝る　つちやとこ
ゑとろ人や伏まきり　すてゝ
踊人や枝の露よきさせの庵
星紙も赤紙の札は蕭り
あらそてたまきり紙色や人の上
夕霧の盃茶さまるらにる
雲低し　子四ッそきの家異
家の秋や月流しし　西明り
家子中ノ　秋のまさき　何梵ん

おく露や七月まて二夜の月
掃けてそのゝ跡に庭なきま
秋の日れ西によろりく濱七里
雲の山立ちかね七なきの盃
鍬出て鎌によろりく角力れ
稲妻やあはれてつゝき水塔婆
いなつまや春にかはれり門むろ
むしろにいく夜寝ても女かな
あり家にまそ女郎花もちる也
刈交て人きえ色のみえしるし



茸やきのつまきとてもとくり
紅葉に緑染の文字ひきかく
茸や箕へ落もし雲の跡
二百十日てみかくれ菊の徳
あるかまし二百十日の稲の臭
松の蛛茎の色によろはりく
いとゝとそてさひしきまきゝえてし
氏呂二在子に喰もしれきりれ
竊なやかしとおかめと菊つき
萩咲や種よきまくる家中

くゝるえてはるし　をすゝき
吟漬は遠し　越中丘の雲
芦の穂は西日大きに見ゆるとの色
あしの花の高町起春の月しかすゝ
椋鳥の宿も　西の御堂かな
あきはてといふおこる浮乳ゞ
夕風や穂の上の高　師
焼土て見きはあかるし　時雨
探出して山に焼ける柿の雲
春しくと多るかゝる　菫谷ぐ

空見て　風八月の白和哉
鶉なきや今くはえるを修行の跡
待宵やいくら掃ても　絶居
昨月や晴きての後の病草取
負いろや袖あるぬき峠の松
名月や定まさきてもさきき
水のてやまいかやりその月
月見る寺の笑話の山おくて
月の出内見付ぬ枕の字ゝ又地
雲子色　暁　いかゝ中　秋の月

明るや小舟さゝて　京そこら是
いさよひやんえるし　付まとふ
ふも皆ありうる手　秋の夕
おもよき子守唄門や秋の暮
うの花の嵐通り　秋のくれ
名月に涼むそのこゝろ　星の秋
初雪し千かね　秋の哀見えし
秋の松や下井手き　すゞ行く
二葉よりうえして　葉の色さま
涼しさきまるる
秋本なし　菜化

菅乃松原とうへぬれ　秋の夜
人知れぬ子を持りし　栗のいろ
たゞかゝし青龍刀かしろぶ
藤の花のしき秋にうつれり
夕暾や紅葉の上のむらがるきそ
日の影をいつこ紅葉の宿　林麻
料ありや一本紅葉の門に焼
錦木や常ハ花とておもりぬれ
萩咲や明てハ去き　宿の下
掛稲や小家そうかな　梅ゆるき

秋山や小松の中のちらし稲
新米や様よいくく下は空
粟売の中や風呂場さき明り
里人の渡る来て店や掛れ
末枯や田ゆし辛くく時の霜
まここの水や水田よりつて枕まて
稲系瓜葉秋に渡をおろり行
外你て緑木葉ふる松さゝり
飴きや肉よたらつき味噌の味
旅心椎の嵐よ別らろし

寒

やまの下葉水葉や枯の多
枯らやうしろ時て枯くくし
あさしの月字口いよ侍つなり
枯まき乃明月の光かな

## 冬之部

南天乃赤かの寒さやかしふつき
十月やひらつ御よやかろて
十月の空や猿のつゝしおもて

十月のあはいつゝ二ふの空
神の留守とて捨ぬ子に怪我もなし
冬のよき食作し松しみけり
松竹の古き都やしくれ
時雨る菜焚きすて鉢付の白ふかし
冬ごもりや苦を萱て荒て末の菜
冬こもりやなを庵の柳　桜かさき
口切やこしやまれこゝ　発不
えゝ餅にて八錢の猪の子ら
ぬるきて時のあつく小春かな

りふくりとてや時雨の雲のむ
冬くるや沖へかゝる鳥の声
狐かく行れし時雨のかきつらさ
穴よりや時雨みりん松の声
くゝしゆや通宮の上のむしゝ馬
窓の前兵藤より　枯みず
枯みぞ茶椿子まりのかとゝりゝ
一ツ家の垣に柚わすみゆかず
落るりさし　もうれぬあみかず
さゝ人をや来て尽るなにおてみる

日のあたる浅ぞし　枕尾也
るつしう兼杖つる橋のふら
松細の去てめ茶の木咲ける
それの秋冬木の久寒りもやさしさき
果漬のあくるき目さしけ
帰も清見せるて出ちらん
宿蓮や百歩のかりて小栄垣
かはらまる日のさす宿やみての梅
みての蝶鋳へ鋳ふしるれり
そてる訊ハそめぬ茶葉の青ほ宜

志らくと降や前之の夕小雨
ひらきにそめ集る前栞だ
薪つむ山もとすの十秋哉
それ柿やものの作る河原亭
それの空法牧ハ戸さすさけり
それそ悦ろん類そつくし日覚し
それしもや彰とらつるその花
それ柿やおのてよかくる数の前
それ方きや戸柿の上の青麹
それの柏花実ハ気も角も強り

風やいおもし　小山伏
こゝしや江河の中なる古梓杉
風や藪さし後のうしろさ毎
夕毎の浪そゝく行きとく
秋よりして雲寄のきりとく
きゝき松の銅割ことろかる
枝残のえひともと花綾よきぬ
太秦の子よ遠つり扇子ず
うち左き菊の眠らや袷ふとん
納豆やひゞりハ寒き　菜横川

その日の川原できらうかな
川ぞひの引ぬ枯葉えし
江の色よ引寄のうへ　土芥
百畳の従ハ志しも海草船
くまやられふるめくる雪の跡ゝ
志づ雪やおもひたびれ浮せれ
雪の子乃てふとんかぬるおもろき
雪とハ風の友ろう雪の竹
よその雪　宮子　枕うして綾ゆう
きさえきや日るかやいてひとつ流

炭薪に古び荒れたる川の月
加茂川にをりいくつむかふの月
野立や荒れまつおろしの浪の穐
安らぬ世や足まで浮来る月
秋くるや日の浮行く松のしま
枡谷の橋渡るや今宵の
秋似る不死とふるし市て葉
秋の夜に更けて松乃実生ず
春入りても襟にあり秋の月
世松に示して入りぬ秋の月

枕にも咲かかれ老白のつき
夜の木立くらき樺やそくの月
宵月やあまり晴るる空くらき
月ゆへてさり女の小哀れん
あ後つちのかい渋れ桜ちる
千字枕やきよふい沖の餘つき
奈良には何と悟えそ秘くらき
山鳥にふまへて啼きけり
玉川や澤田や水の空そそる
山かゝや影れあくれ春ふる

隣までもまくる霜の月夜かな
埋火や夜明の月とろとろよ
茶もわいて帰るも浦帰るな
燥むくや日乃連子かのお
寄寄りて孝女の泉を流れり
枯の戸や炭荷はたゞ歩みよる
小雪ふみあゆ埋めしたまりけり
身の寒み小便くろしりわり炭
夜すかし大きく見いそ甲迎来
師走空や一きる附りぬりたる人す



極月も人突年越角字ゆ
野の立枝と来り一尺蔵し
むくの川しめや柊赤鍋
餅つきや礼付あき人こゝん
さつ旅中や引すま餅をふ雪まて
いつのまる青くるゝ月のむし小峯
蓋の門菜の盆掛りくるゝ月の暮
行らしや野の畔斤ら赤
紙くるや雪の里こゝる宿く宿
ねたまとこその尺てすくるゝりり

白のまへさとふりきのよかふ
あ早や和ら祈の佑の別るとき

錦袋集

夢かくむつき十日あまりふろ
の秋の世ころえろろりろまちく
尓小のまあそ人さいうしき
父えて枕はんしまゝまくきもせ
ておいそし の花くき来る春夏
もてさちるあつりも志はまくれ
多脈え志まくる 数ありかりて
大いゑて此世よ とまりさんとら
は多て ろゝゝ字 あのしつて

辞世のてよすまる文意ふある
とのなきにとて讃詞なりよくて
きゝせたまへていつれ
筆をとるなりいそとおのつから
硯引よせてものしよふらせ
之人のたまひ
をのまゝ十人並よるなり
此句は玉あつくとのまゝん
てをきつるなりしたそのちゝは
言葉さるまきへれ出ていさの
とりわる其念とりもなほさも縁
耳縁なかもしく是のまゝ此日も
辰ふるたたるもの年
かの貞徳の写とやらんは
恙し嗚呼午心翁の
生涯の花愚なるまゝ

紀よその一文もなし寒や花　北元

浮世の気は少くおゝつきれ

洒水忌

あらゆるやおいつもの梅柳　仝

なふぞかむちるは実やまゝの　志つ女

老の立所のちからく手心か
　薬を見おくりて
正月よこのやうな日々みくさとハ　究来
　よろあつてとろさてのこの
　しまといつまも
そも行たもやさきもむの時　寒松
葩守て了日と見て梅のあと　菅雅
　年ん〜し君まつりやまれし
　と示梅泊よ待く野さらして　吐論
おそれの飽し涼月よ浩る雪
きつとそく頌よ梅の十こい　方壺
空ちし一日梅のよふいぬそ　對山



至るふき心おかいぬみそまきて　五絃
　月うたる弱かいをしけまむの
　おつくもそろふく法行かすり
　里の是お了好豆守仲久と考
まのかける然いくそく湯の味　豪山
ろんのそのまたも菜そむの梅　玄夫
梅あて梅の慈しい二月かな　玉桂
　師のみまつりをと告こもし
　きのみいふかふくりふい野ま
　望ハ又何とせん
おりひ出あるのとるよ春いす　其道
雪の窟あしとすれとれのあ　桃斎
まつの山暁筝をかけ見ん　芳竹
青うられと見れえ柳い柳ゞ　木丈

新よ桃流む柳やすゝゝ川　宜令

植ゑそゑもゑてぬ大江戸や　響美

午心居士柳下にいふりそむるれしにまつ俳諧の発句ゑさらし及ぶきそろりる事業のいまろして何くれとなくおこゝろしけえとせらるとふゝしん風交むりしに悼つることも目十かくりかゝうれしとそなへんとハ

芽柳もうるゝゝゑとふる世のまゝや　十明

名にて向悼の句得させ畏
句帳に記おまゝ寸

芳しき名ハちり失れ梅の花　午艇子

ひとくちり一葉落さや日のくれ　呉渓

手折ても向のあとしめるゝかな　亜悼

ねゆきれて見しかすきさ鳥かな　为電

こんふ春はあゐきゑぬれ梅の花　葎砂

笛吹きゆ飼の手やたしかれ　旭塘

香そとめてちるやうなきも今　杏叔

春ては川越の梅そ香に好る　蒸洞

梅は曇りせしそ咲き見も房　乞及

名高や帆にかゝる須広の揺　吾友

春風やはらにそ梅をてうらなゝ　安仁

人を見て咲そこそ子も果子そ　米瓶

人々の字つせて折うや春のし　独月

曲水や何そ見て咲みゝも　柳雪

萩ふかうして見事なり庵の秋　花月
青柳によれしてや戸口かな　定九
影の時や夕日の茶つくさき　鈍心
梁や浜の松ゟ青くなり　延思
ともえても霞なり八ッ角かれ　松杜
松原にはさはさるしてとらぬ　竹子
ひとつ来てみつれし小きの庭仇　晴枝
梅の色を見まして花みる山の中　不去
梅てりや素きよかと花いれよ　起とく
花のおもひ余りてん梅の句かな　まゝら
早りも柳よかえし梅の宋　五莖
夕菜や根手ちる中子のとり　秋兎



二夜作く月や華の中とも　午睡
柳ちや打かて見まく於の時　起孝
杉形の光を振らりしまゝ哉　有月
順ちちも八織の世界ゟ　宜乙
よい俳よられまと時よ里まゝ　李室
な喰ハぬ虫や釣りて香を訳ぬ　曉岐
影書きやうゝゝあろうしと見ての書　午枝
目よかうらの此うえし梅ちる白　百起
伏よ何子見よ高花　まつの下　連帆
梅くつよ見せしハや花　此牡丹　流風
花を見てもさけつておりふ今る哉　兼好
在すゝと何ゝき梅の花ふらゝや　渚登

ぬほしゝ咲や牛房もものゝ妹　孤山
荷に女の耳をさとつとよ　竹妓
木かげの松くぐり越えるゝ晩に涼　起一
春の日を浮世のかとおもひけり　起任
外梅やちてりと来ぬ池のそし　雉闵
名月も来ずけり秋の訪ひけり　志孝
笠かけり秋従やうそぶ宿の下　行る
松虫の傍に渡ふるし抜さくら　湛外
来りれ咲やニッ四ッ九を盛　淨子
こつ拾ひと月の夜たか今日は升　彭山
春の七て夕暮おやそのうと　秋風
桜手けつくし門や梅の花　一葉

梦との花を味へよことし来　起立
保お行庵に於法不ら山法師　魯丸
一ノ宮や法もし茶をまゐるかも　找川
名月は似ぬものか秋の暮　康阿
菜畑に篠の如くや咲きそろふ　路生
あをしくと以ふも世中の時雨　欽る
梅ちらやんあるき仏の日　雄山
盆に六字かき添へてり重ねゐる　麦之
明かしもそらしるいぬ柳かな　ますぐ
秋の板や建ちたりけり稲の縁　孫左
そゝよ建出したる山の札　槐市
百姓もあき時雨の法きざし　盼鴎

ゆみ初音や松によつむかと　秀佐
まだきし日も海原は青ミ哉　推泗
あれなとに夢見しもしほや哉　常泉
返る花を惜まれしやつやふき　松交
吉柳や余所の雫下に涼　蕣考
松虫や伊勢物語枕ならべる　田曳
あつさくも花野の雲の解けり　富介
何となく口つかひけり信太もり　笠山
蓮さくやりけふの上の月明し　起旧
草木に戦ハとつけ枝れ夜の夕　千連
解るすあれハみぞ雲のあさうさ　翠柳
雑役のやすし隠れり桜のぞ　詠児

菊刈しおりしむしもの葉哉　渭明
竹菜あちこちもの棹かれ　柳山
そのはさ字名残れ露哉　松下
竹手傍ふまくらハ花の跡　松嵦
師の顔見てふりぬ物も芸に　吐雲
ちらちらも法の色見ハやつしかの　子芳
うちられや石ら夜ハ草ひとも　旭志
さゝをくぐとすきハ也れする　山松
ものすえと涼しや怖とう　松枝
名月露見てとこの撫し哉　江琴
新ふまぬ花の簾よ今日の月　紀莞
ゆくゝや邪の奇子おもらて　陽李

衣鉢し今年

庵添し門の葎も打ちまり　不騫子
夜もやらて果る字績かよ絹の行　青牛子
末広よ石二も画かれ江戸のむ　錦志子
うしかうも行来も打つ庵の夜　坂斗
見すまなん玉宝梅を承ふ　季石
無梅のかや花のくれこその　成謌
むきえて日和の山のおりるき　可浦

○

ろうきあをや柳をみて梅さも　梅流
色みえ々や猿まつらとまめて　杞柳
汐風よ新のひつくまりし　月湊

冬の日のちかきき上やなの月　黙如
冬そし川の底も打つき事　山兒
ふゆ字集て八来す時鳥　陬伯坊
風よ呼まつし女かな字　抱庵
世の中よ移しぬるの八梅のむ　葎鼓
阿部川の鎌倉も来て行か　禾豪
箱入のありし打も咲いとまか　寄左
来しもかくそくものふ庭と　嘯山
ほの子よ月めてあそぬ春の雪　閑石
咲おとり々紅葉の作る垣　菱山
竹の葉のおハ咲ぬよみしき　山花
打まやん部かせてつらつる　芳子

はさんで寝んりけし虎が雨　六吉
三月とこそ竹のやさくらかな　孫月
樒咲く谷の作りつゝけり　千雪
清く降りけりの上や花ききん　三宮
星まつり八十日もすぎし梅かな　処は
可も不可もなくて柳は枯にけり　なて
桜咲ちるまでは大きかり去年かな　東子
柳くるや寺はあのして山の隣　笑石
隣ひとりふとんに余る松の風　白程
松影をそくて月ものぞる声の枕　歩景
碑の前に筆かむ人や秋の雲　傑木
花の月ふるき柳でおかれけり　諸白

かきつくる柳川の手本のして　寄瓮
かつくと流れにひとく飛ぶし　新米
花の道ぞ今は柳子春で尽くや　一瓢
菜柳や月のよそで見て更る　清素
松の紙にまきて月出て　雲石
孫子とていつち行ら人日の戸　翁丈
落雨に不二の行来やけふ夕　里蒼
ありかの雲川坂つ中掛ぐ　ちさ枝
色々の白ムそしかよおめ子花て　晴谷
そふ～や夫の細竹の咲すき　然耳
後抱よおしぐりやえの暮　光とし
示ふそ通りさしり夜の月　わ左捨

月の松や寫や巻込松の影　　文のや連 元暁子
今宵の夢月まつみちかな　　暁春
あしの芽のめぐりさよほの月　　暁抱
夕霧や月も刈こむ稲穂かな　　元雄子
野分くるや鐘や岸をめぐ也　　元安
釣舟に桔梗ハみすこさるを　　元明
田の面や刈取れに夕つく日　　燕司
秋きあふ芒の中の手みぢか　　其不
家蔵や扇て干る一里塚　　元蔵
見えみ夏やそくへ行る為　　ますし人
稲の田に余るまや町かな　　元清
浜辺に泡のとまる墨かな　　二江 元ゆき

青あらし蕃の窓のふかくて　　元よし
鶯妹の羽色も見け神清め　　了彦
松のくれ時ハうすくらかり　　山三
旭さうつしきれいふねよあそ山　　為夕
色こに日ざし動くや芋の花　　三楷
菜の花の景も並や志ふりけり　　寛山
梅しやさときふよう涼しい　　元晴
梅にあそびとそよし松の風　　窓輝
まさに広やけの清まり風さき　　若路
松風ころく松と声ちかな　　元風
海棠や青峰の色を孤すし　　不九
つくね人と物を見れ吉の冬ぞし　　谷十

夕暮やかすみてふよ鶯かへる　與六山
人ゝ鄕といへめるそ柳かな　柳美
まつの葉に朽穂の井におき足　茆志
なかる人のへ子や寄めけり　米一
心あふ左れ神北の剣哉　巨井
星おちやはすみて見ゆるとひの木　犬河
りゆうもふあるの枕のうれ　如雄
芸ゐ元のつとめハ揚れ津の暑　菊管
蝸牛瑞戸の積にくもり　松飲
照射業子をつ待ちにけり　麻吏
福そ人参やおろかの新作し　かとき
ちるおもよそのきれ哉　山鳥　可朝天

松ちや鈴さひけり帰り多　由户
時も汲一ちいの秋明かな　兼緑
ふらくやくもり時秋ハ定し見れ　青父
果たま耳字をさけ之揚女由　有儀
きりきれふさ会作をすもむかれ　柳車
華さくや光くしゆるちもの棟　米府
庭子しふ秋葉よ京ぬ備河　不及
鳶しと俗の見るらん　枯亭よし　牧子
寿仏やえるの味跡を一手桶　东埼子
をせ芒し梅のしんとつかり　澁ず
汲の末てきりそうめ吉満　石萬
枕ハいるき施やん座いや秋の夕　桂雁

そやかんの明て春日山　蒼波子
月の影すゞしあり明の夕　一鳳子
ふらふらと行そわかれし夫の宿　一笑
雲の中の芙蓉画工にへつらはれ　千沖
露かゝる並て二疋ずつ女かな　小竜
秋風よくれもとの昔妻かな　畦外
朝逃橋よ月を明日の夕　渓水
よー切やべの菓子御鹵簿し　明月
夕暮をうけていふ夕あま山から　竹慈
時よりて刈込稲子が雲が附す　葎滴
行き〜やらそ詠めて付まつり　巾斎
たまらぬやふ図西子ものゝ上　成之

互にくれ互に老てみやきりれ　蓮外
柳ほとけや梅かしもとのまゝし　棹歌
まくめうハ下し梅の香流き　燕子
うつの南を宗氣のめぐりて行　和楽
窓田舎餘すにてありし子を　春江
ちりさくら芸見ありハ止かくき　蒹葭
菊の時移ろひつりて善よし　風菓
肉洗ふ関というもん紙哉　我扣
汁の穴と見えていりてのゝろ　さとゝ
明月やさぬりしも其のさ　舟子
花くの目よ扇ハ寺梅のとち　魚山
風よ向て行くや牛の尾　芳徹

白露舟ハまへまへうしろ　只佛

人よせてこゝのしてこそ秋まつり　只来

茸の謡のしるし網代守　亀龍

ふるふハ先ハ一番よし初かすミ　家葉

浮出し茶も葉ミ其のはへ　芦錐

あらしきふの白らや初時雨　春口

ちぬやハ十の谷の紫陽花て　華挑

梅うの井も残るや夜つゝけ　谿浦

行方の姥ゝやせ去年の月　有考

坂つゝき新酒しや表ニ　鳩川

秋風のふくしくる人心　梅足

月の庵筆もすてて只ふたる　篤口

餘けり雪をおして五十年　亀旭

湛露題

似暁の空よこの新家の秋　田任

こんふ時目のまちかや秋の暮　若宝

須の灯の諸行秋のしも　京生

足袋の庭つくる上や鳴一　如京

秋山やをいまよ人の声　一瓢

命ある身のきのよ網代守　茶船

此ゝかけて叶るなり錦義　みとし

秋さゝり四の池の滅るやに　如瓶

只そもし月まて恨み鳴かる　文雄

商人よ訓条のつきぬ猪まで　白鵞

女なまて女の師ありもゝ九山　午牧

みしかさや寝て月のありところ　小知

雨の日やおもしろそ姥の清水　玉園

さくらもちりすきや臼をこうかな　秋里

けれと見えしこの世月おほく　未足

をきめつついつか風の吹きて寒　芝夫

萩原や山茨やくりつ家に立　子松

牡丹の花を日本橋ころかり　四外

芥子そかこむ花の外ころ牡丹　鈴田

柳の夕くれ一むらにひかされり　亀峰

ゆかりや菊咲けり太はゝ口　紀自

そよき若葉日ハ見つらきて川　菊鳩

鶺鴒をそゑ娘の来ぬれとみえさを　午枝

稲原や錦々ハりかり　とのし鞍　仁瓢

芒中や月ある紙のあいしきて　游之

昼ころそ見ることのますすみ候や　中川　琴風

つくりてもかひなし麦のまきて戸　正玄女

佃るすまよ柳の下庵　深扇

雨は跡にのこし香れよ古梅の　文介

きぬ人もあかぬ人にも陶花　佐里

かちしと雨の手りや梅のとき　中川　尾去

挂え、いもらい客中に松の月　会山

小蜂そ追うそりゆかりかな　会人

稲むらの香れ一こゝて銀紫　寄仁

を木瓜よかゝりわたりや一香の色　抱麻

夕立のあとは露ハこほれけり　蓼洲

晴えけり持てゐても花の露かな　袋中

扇の風や小楼の月ぞ鳴く蛍　千里

小村もの待ちて来てもあれは　素琴

松の風涼し柳の空　陵渓

まぶしいくもも夕日のかげかな　九粒

葉隠れ白さはかりあらはれけり　竹ル

こぼれの行方きへけり抜けゆくか　秋芳

行き来やふてまゐる晴の夕　京画

草の根をひろひてあるきものか　清羽

仏名やえけり月のさすみ　古雪

梵字や葉やしだれの木々の葉かへて　得所



朝かほやあさつのものの花の　葎兄

花の夕晴ハかけにまぼろけり　秀彩

木しの下を見むかき流し　叢船

そも晴よむや添ひし人の影　玉笑

何となく人のかたちも白かな　車光

紅葉の陰の露の夕かな　李つか

そもそもよ菊にふきそて　可耕

石のそたたふ月や梅柳　葎夕

雲晴ても月さかりかかり　政車

雲を見るや不二八目元に入かかり　文車

むかしの人のなかうらめしもちし日　千かか子

正月のなるかかる月松に　梅史

晴る日もくもるもいそかしかふ　西湖
ひとえにハちるまて見たし花の色　方丘
こゝあたりしろの廣し桃の花　圭美
旅人の〱のさくら薫風から　梧友
あさくりいろ〱續けうきさかな　詰月
春のりや山見る手の船揚除　李濱
あかて逢や横たよ秋の都　宵盧
草まくあひて見てもころろ〱　三昇
きのふ見しまよふかや楽二ツ　佐賀
春風や旅逆のあと見不ハ黒き　亀亭
月のあと客りきもよ紬めまし　花笑
あをの物まくらくて静かなり　五柳

おかきま咲て春くらきそて〱　新花
朝風や春をそふる柳よ鳥　花好
ゆれて行とき晴る花の山　再柳
風わの柳折りつ〱し茅まる庵　亀勢
秋の雨下寛の柳や〱そ揺　曲郊
ふかしと味嗜柳まてや猫の声　亀馬
春きくやせみろつくと嘆雅文　亀遊
川原にはこふ衣やよきもの夕　庵松
そのかの人の心と流のイ　亀式
夜あけ見付て奈良本のも　翠松
梅咲や柳のゆふまてつく　翫令
春一柳や傳野し雑洲も云の汐　松蔵

手向悼衣鉢四時之吟句順無甲乙
みすから

梅みて見まいハ花の咲ぬ時の、　義風
住吉の小草にま子見付けり、　五葉
いはうしるの雨や蕗の薹、　和琴
花供や人の月のハおそきもの、　蓬史
色を添て衣ゝまれて花菜、　古延
行柳やくれるみのよせ山、　松洞
浅井や春雨しらしものゝ味、　春江
あとかもしれの夕かけ哉、　菊洲
やまハきしれも八はきよれ、　仁康文
思ひの家に奉ぬ春の月、　三径
流かれき、千暁の花すゝき、　李用

鹿なきて高く入日をおもしろう、　乃蝶
出用芽や秋がほの色を打、　花洲
花出の日うつ見まめ鶏ゝ、　小華
吟出て花秋よ夏すめ、　可亭
秋の月しまふかしよ吟の一茶子、　月花
徐る枝のよいや松桂、　和洞
手数にても打ぬ金うけ井、　浅井
爪剥とやする秋ずさおかれよ、　浅府
相のそくやとなりとも寺はうする、　緑彦
六月や秋のゆうして花入るゝ、　浅文
入る女に咲からんも花、　帰孤
千まの名もちも打ぬ麒麟草、　素童

咲きゝ東 松にあゝきゝしれ、 巴笥
さらしきそ見せて寒らし雪の松、 楳了
きく人をひやすまちあるも涼き、 澄衣
ありてらの月そ麦中涼しさ、 一瓜
あかるよ舟辻てわれ霧ふかし、 常山
振かて耳の涼しや つはのむ、 青牛
れとめぬ花のすゞしや袖かれ、 柳地
二日月や舟戸の涼しさよ日、 夕右
小夜中のへりしらむや軽卯豆、 鶴泉
つは咲や蛇の日なたもちれてあり、 藍於
すゞしさよ牛ところぐや 竹佐子、 丑味
草の戸の人おきて 旅して、 吟竜

梅なる もえり たまふひとらゝへ、 所沢 筝居
卯もう子てもきらし出しのゝゝ、 里之
雨なや花えて 冬ゝて一つの松、 キサイ 久お於
蛙ゝゆしさん含されぬそ 雨気き、 古嵐旅
織なや からうるきもの噂こけす、 本宿 素海
切株ゝうまれかゝゝ 柳くふ、 川コヘ 伊昔
こゝ寒こ子い容ゝるゝにりゝ、 紙笠
見てもちゝよ 二ゝの 埋る花ゝ、 吐居
卯月ゝやら見ゝのひまそ 本綿ゝ、 手恕
はまよ日の影おれ 草のうら、 小深 房 芦月
ちらしても すゝゝ まゝ 白つゝき、 北冠
松の咲て 門さへのそって あさくし、 いろは

菓子かくすやちらし中る椿の実、　有得

朝顔をもてる手萩の風情かな、　不知

月もの佗浴し天の川ゆき、　江見　雪渓

時雨やけ付て立つて松の姿、　天津　梅月

柔月や青くも切る羽衣の波、　市交

月雨てしころの夜の月見かな、　路春

萍のやけるちまきや桃の雨、　花儀

まきてくもみしせきえと空夕、　久保　松長

つゆりしく又あいりやふんでの声の、　上総　燕八子　三圓

松手柑やちいさき春のぬれてもつる、　アラ川　泉玉

ろそくも時々むすびかくる松、　椿　一楼

時かいろらよ時の桜に喜も、　竹岳　五有

逃小とえまてかうしき金飯に、　不佞

雨く時く行うり柁きん、　松高

赤の母ちりのぬけみ世かに、　菓浦

かく哉やなおき露松の秀衣、　子於

掛香も仕てて花のひとつかな、　天豊　和吟

あをの時る空の青さかな、　千秋

朝顔にも起されつつ此萩や、　珠明

雨の夜や花咲けて寺々の鐘、　江涛

一夜の味を忘くん和れ見、　士気　其経

をのあと手をそへて時よ計なり、　東柳

桜かくて見されぬものの名ぬらし、　名尾

清のまる稲や蘆の真遠、　ヨコタ　五柏

さくらよ多の隙や若芝かな　大久保　秋等
牛の尾のゆるゝしく柳かな　谷中　東斎
織汐や日ぶりの稲田ちるくろ、　下谷　兼人
日の影や山の中途に立りけり、　木更ツ　一川
れゆきまてりや此山ハ多のやゝ、　小石　芦中
侍子くずおくよ鶯むしろ、　武古
まくとおゆふ人の衣にかゝり、　棲古
侍連模なる行でおりけし、　起友
春の戸や髭ふりて多とふる、　禾山
梅くのちらへ見ききるゝ咲や　下総八日市　杲〻
梅散てゐるゝの花に香の捨る、　醉眠
衣むをかき集るよ七く日、　花佛

青柳の雨よめづる若雛子、　錦か
咲そめし梅のん梅の花むの香、　冨之
見えけれは柳や立りけり、　松里
黄色も香ハいつとておりけり、　白濱
春の月香みえの折の方、　東窓
法御示と何を眺むる菜の花、　松戸　官庫
柳や此多めそ寒手て浪くてし、　原三
柳ゝのうへの手や　猫ハ、　業木
さくし咲の風やめぐりみるの、　松把
小菜よ陶淵明のいまかと、　蒸之
新きやちるの館香よ果子すゝ、　酒角
出家さや緑の枝のも出来ん、　二梧

角芽や張落しゝ迷子札、　和名谷　貞松
むしろ洗と流りけ春の雨、　柳丈
それや御亭子やつと藪ぬれ、　光伯
咲さかりと秀の練や手向けり、　松戸　之光
すきしき日の入かけ大枚川、　芳卿
かすみと小その落す桂かな、　英富
むらやよ小角つ翔や啼ずゑ、　山孫
刹立の芽子そありお弥かな、　瓢丑
さくらむさ十椿の元城よ神中、　弥全
風や枝し　つよ体もおと、　義男
春のむの雛きし上やらうて、　秀泉
結つくて一日白ふ本のめかな、　其石

すらくと枯尾行や枯庵も、　秀船
柚の庵作めける神子かし、　友松
萍や浪清の舟のあとそ出ふ、　枯里
菜子の枝しく清や豚れ哉、　千里
三笠山春たちの雪自ふ、　柳枝
萩と菓植思ひ其て元気、　梅見
望そうりや陸しひくろ東ひとう、　松戸　七十七翁　不二坊
牡丹活弱きもよいきけり、　松戸　蝶布
流そり雨そおもつ多力かれ、　戸ツカ　汝来
坤柏まや啼呼とそこまゝ比中、　古済
あてり花ハ付てくるころや、　箕一
あてそく葉つ猶木や梅のむし、　不染

芦の夜の都を見すめの丸、浦賀 石叟
五月雨の心ちらし夕涼き、加賀 飲白
跳くそ柳に咲よ出帆、青牛
倚のおもし川や糸やなき、巨井
あらしきくぬといふれとさらい、百ヶ知 瓦
朝日やたゝるきものそ梅の上、ミ沢 急流
手くちりにおのを見浦まて、縁強 恬人
咲よまも若子 柑の成まもて、上良 丁修 玉芙
折むくるや春あそとるるけり、ミツカ 近禾
寿ちそれをぬの子の深かい、氏附
松蓋と咲出 竹の葉いくて、冨丘 外化坊
花の雨めさそらへ切てや咲 節、凡菊

山鳥の通ふてあとや峰の雪、雲山
鶴も飛ふ 余寒の家かく、豆戸田 午篁
めくみよりはちりも余れ古あを、南光
つきあかり鶴やさくらのちらとちる、吉田 午草
みやこて見正月のさゝらゝ、午蕊
手にもおところれ女娘のおまし、松修 柳宇
月見てさらい浦辺のゆるさらす、子律
咲る梅あちらきしそふく、不倦
羅遊桶まさくらの乱や春の空、富田 然ね
北極の梅折てや春のこふ、梅操
子二の山 飛しところしき、三津 鶴峰
さ咲やあふ夜まの鶴雪下、小池 文山

ちる梅の香のしてめて昼明り　加茂　千静
ならんちりやうつむく椿かな　加州　年彦
冬ごもり夜ふかせて梅さく日かな　三河　淑静
いつ見ても初音ぬらや春の月　芳む
白菫や黄字人のむさくるし　大津　亀丸
見しや其の角来るを字かなる　岩科　三千春
目出たき射行きれ似るなる　春蕾
としもくれ明けそめてゆくのむ　春岳
三上る又草そくふれ花のかる　春任
梅との庵まのまるいて　田子　米只
障子ても見られ柳の影法師　祥礎
けむ字見てうつむきやかなん　文里

海来は降る咲きや此の春　江戸　岩夫
梅の中や青の芽もさのて　又　駿河江尻　完府
春の湊あかもきて山の光り　清水　午友
おかみの浪を咲れかきれ　吐雪
梅若むら日に浮かみし　扇より　佳盛
梅うめも清き　春よ春の枝　岩本　雪川
花盛や見ればそれぞれ花の構　修来
いつとも草ぞ深き紙月　已調
神のみる春の春の声　園李
ひときえ跡の事や赤牡丹　カミヤ　来斗
菜の下に落ちて春の向かう　完冲
後秋の市立中にすゝ水かね午　士峻

松も竹も奈てゐやくよ三五の月、　由井 徳承
月影の淡し淡みよ人の恋、　月彦
絵の一夜おはしもまへしとふ免、　西月
吾これよき摘けきあつ於きん　玉川 吾成
明るくや日ハめえしと鳥かり　藤枝 よお
名も　名きそ徐て夕のに　府中 詩三
けふ時ふう月も嫁しいく、　枯木
雨も待つ八九一平よるふうな、　佳圭
夕そふハ活かるすやまの雲、　斗
名のあえ雨と明しめるる、　柳香
ちりそて名のと松ふ　奈さく、　同 晴我
言名ハ筆のゑ　掛あふき、　其糸



待の子の雨とや立ん　嵯峨 京 去蓮
みとりてあれも訪るの秋ゑめ、　沼津 たつ琢
炭のおてより傍て嘯ふし、　旦布
月ちらしと時姉や苗代田、　旦更
明月や夜さはなるの雨、　文糸
雪袖の香や泳よ沖の舟、　鶴雅
稲妻の影よ端縁の怒かし、　雲鳥
かるおもるるしをの峰いちる、　麻太坊
野らつてね名らしと来さき　天 杉書 徐生
むさし野よ解庵ろぬ雲仏、　白暁
けれハをうもかしくらと、　徐来
をのゑ乎久れハおりく　けきハ、　徐全

月まくらの哀れそはぬかな、　全来
いつとも只ゆかしやもの下、　素流
行ても大方只れハ只見し、　竹馬
あてね秋草かな大さくら、　木圃
咲ほてこぼしをの名物かな、　燕来
兔も雪もおきハをのあで、　午帆
世につきものハ罪よな梅、　葎卧
作史のかこりしら露かん、　仙台 佃山
まかろしの立氏夢紙月、　豆 加茂 波丈
暁の月字のうして帰ア、　下総 稲村 茂陵
良れよやちやもの墓よと、　舟橋 里芳
梅あてさりしき庵の月枕、　也月

秋らや枕よりつしまくらかな、　行徳 其山
そのるを哉織のすゝき、　宝蔵 桂律
巻行きや万方の中へ哉、　渚月
聲よりても斎よの秋の暮、　十業 東湏
紅葉や君のこし色うつ咲、　求如
枝のえ字わりて来よまの春、　三友
月秋斗うてほしき浮かな、　亀柁
田へ入る菜の白ゆやものかな、　秀紅
月一ツ柳そかく露 夕かな、　冨有 燕山
咲もを世戸の枕ゆかも雨かな、　柳美
ひろくろいて止れ落秋風、　名洲
水枕や風のちるもとらおそ、　我石

望人とおもふ梅のあるしかな　二文守山
人ひとりや田の上の春の行　一乙
思はれし梅に在て七千月程　蝶芳
かゝつらすゝきふみて帰るし　三禾
経机や目にきえやらぬ明の陰　我笑
鉢木咲ぬ老の春も麻こり　榮林
咲ての香も花ある世法の梅　一氷
手をあてゝかさにおもふと梅香　雪梢
名梅の香も材済人法の枝　重光
世は光梅ゝて清うる重逢下　茂松
春風も身に見えむとのまた夕　未廣
春の月入ての底のたまるし　急所

香を弘免して梅の手の日かな　梟為人
薛元の竜もゆきやるる帳　子峰
春さる梅も気太のあるしかな　盟酔
不梅もくらしや紙月　急洲
二千流の御衣もかへし梅寿美　清重
子まゝに鉗すゝめる敷菓　重壇
鶯お見えり山陰の竹もつし　如介
手あ揚や梅かげのきみのまゝ　浅叢
梅ちりや屋ゆのお手はなくて　蒸秀
梅のかえり何れのれの旅るる　梅人
美事に入うちうの小為や果子ゟ　緑生
さりさや羊に候虫の梓小舟　恭雲

鹿啼や夜拵への宿明り、　为宸
山畑の木の枕椽わく小さゝ、　似九
名もしらぬ菊の通ひや芸湊あ、　守節
弱げにも起きやせまし人、　幽芳
細折の葉ハ棧小石ゝ、　如竹
菓子売一夕咲えば何呂ん　陣川　正音
松の葉もあしたの形のすゝき　二文　梅石
見芝のりも申まう実の花二、　上分　且松
添しさや松の中より松の風、　掛川　壽喬
年さして尺虫よりも柳かな、　起主
菖蒲の不晴の門まぶ露哉、　青莪
去年て宿に気まし実の事、　李海

涼しさ月のひかりや枕庵も、　門此　五潮
櫻ちるや箕の子まちく菓子くし、　可竹
小梅や咲けりき咲くり、　足付　笠翁
千代添つき亀や古田の八重、葎　れ良　菜英
ばさりやや芸の経叙明えるむ、　来次　系兄
吐きかとはよ人もあき出来、　及人
すかしき見え日を花に秋曳る　れ良　谷　葎雲
立秋やとの気の来のあり、　得宜
松の葉くも流しゝ蜂の夕、　木七　恩白
そよの来てこゝろやほとゝぎす、　梅市
あの字やあるもの降付るゝ　大山　南岡
をさくおてものあまりまよ　信　留田　月蔵

せゝの乱おのつからやあさん　浪花　月江
香し香し枯れぬ梅は手向となれ　阿波　禹鉄(?)
香の香し帖(?)ふ主字好、　寥天
梅の色のし綿りぬ香木立、　詠鳴(?)
沙(?)きよの路はすのしるし香の山、　採珠
竹(?)卯して行あとさり夜月秋、　容外(?)
行春にひくと綠村(?)の詠、　寥免(?)
十月や老も交りて藪(?)の中　武蔵　玉圃
夕ぐれ(?)や椽にうつまり柳しくし、　藍可(?)
山吹を笠に手折りて女達、　可也
菊の香よとし強(?)き集のくゝ、　小松　為聞(?)
てらさ海てなとれる木立、　田村　与帰(?)



宋子を好(?)やいくらも猪師し　平沢(?)　鶯雪
紫陽花や宿をもへ好て落とす、　信州(?)　佐和(?)
山吹やすゝ払てある下清水、　林之
暁もとりていのりまの舟、　琴雅
梅て咲てまつくりすゝのような、　花守(?)
花ゆくや子ともにくゝ鶏の子、　桃舟(?)
おしひらく花の戸涼し今の月、　兎友(?)
山清(?)の朱筒子踊(?)夏くしつ、　宗雅(?)
鳴子に露も見ゆるよ寺しのゝ、　舊芙(?)
入れの門あしりくや蔵行く、　去帰(?)
時鳥や山一声に鹿つゝ、　文魚(?)
辛子秋に白兎はしきりに春のへ　粟川(?)　軒河(?)

ふる寺の木も暗や秋の蝉　箱根　古彦
明月や此秋まても京ならし、　大坂　芳洲
夕霧やかくまてあまりおもし、　秋信
縁先の障子や木槿の咲捨め、　湖月
寒さまてころ善りふ見ても一、　履氏
独り眺めし秋きり時雨　八坂　十時雨
井の上や松そろへさた稲、　本荘　汶暁
初秋や荻はおののすりきり　上州本庄　蓮山
蕪咲やまたなれぬる旅さする　下総横江　是平
つい名のもしろかりし秋心、　紅二
秋の色の紫な染めて居ある、　東芸
きりさやいくつ鉦ふてきかれ　武州熊谷　轍之

虫ひとつ鳴き来ぬ秋の浮き、　花磨
薄さなや折向の移る袂の菊、　春月
追風の名残りや夕のもと、　大宮　嶺松
いろいろやたきそかゝる古井筒　遠州　東車
見のうなき衣緑る杉柳のもと　川越　識雲
從と終られ時の大伽藍、　楚居
明月や竹の小枝の送り絵　元府豫台　一柯
浮かる月や源の汐時　下総松戸　午亭
松は勢くりむすし白ひ　川越　東奴
鶴の尾のむや見きて衣める、　粟人
ちらすのもみかいなき菊や、　吟径
くり川や松のそろまく一時宿、　竹院

秋風やきのふ行く〱明の空、　夜芦
猿来やところの湯も打合て、　亀山
月守りもまてゑのおろかなり、　吐雲
名代の中一流るむこてかゝ、　作之
夫のは路の結あかりけり　豆 吉田 さひと
今朝の菜の新緑さそしや正月　越ね すナし 白雄
初月や蘆の浮名をあてゝ　下田 里岩
盆のまわりおほむ　菊かおる　水戸 松園 五風
梅しやくゝゝゝし　鳥はしら　二文 石新
春やはし若ちや行や咲てある　上井 東洋 湖月
見せるやふ新のくる　稲のわ来、　芦暁
鳥のなく枝の鳴てみる　菊の子かゝ、　南恕

涼しさやちりとりも何年の雨、　南和
枯すゝきのつれ行きゝ、　清舎
春雨やふつと人の笠不おろ、　太郡
菊さくさかりと不二も見ゆる、　芦雪
西へ便りても、あかるさ、　芦川
あかりしき門の白やまつくさき　参河 林菊
秋桃や月の暁よおりかし　下野 佐賀 泉松
花のちる尾の暁まことしり　越後 卜口 後輔
鳥そこそなき鳴や寺の葉　武蔵 玉子 有堂
松の葉よ涼ふその葉や夫衣、　貞来
萩乗や枝おもての新尾花　下総 前立 池柳
春の雪止とおりしき空こま又　上総 糸久 史雨

月前て浮くるかや天の川　武李半 不玉 
窓の内急いで出て秋のせき、　花泝
尋て来る名のある橋そろふ　下丁舟橋 池孝
冬の時秋や手もて其袋 来　江戸 時寅
其ゝ似て身の後秋をかくされ、　羔人
素山や厳しく人の声、　紫扉
秋の夜や秋つきて麦のさなか、　望人
新きあしを蘭と並ぶまれる、　時ゝ庵 楳山
行路て夕暮作る柳下、　楳英
麦を見ぬ子ぞ池杉のかげら、　楳谷
秋冬の下定まれ秋の山、　楳亭
明月やや閉ぢ付朱の客、　楳若


俳諧雪二庵北元著
戀志ゆ　全二冊
此ハあゆ中立の詞を依て的う集あ香註を加へ初心之益ある書
價　之包

仝撰
月並發句集　全一冊
年ゝ本出来
文化廿之年分出来
文政寅之年分出来
價　百弐二泉

仝撰
午心句集後編
卯ノ秋出板
追加并四季しれおる心がのうち

仝著
俳諧乞食袋
いろくの書物説々その仮名抽まり佛徹ゝ益あれを板華ー註を加へ初心ゝたらあしむ

書林
江戸日本橋通四丁目
广は紙問屋
金花堂　鴨伊兵衛
同四日市
松盛堂　松屋善八
同